日刊留萌

2020年（令和2年）7月7日（火曜日）

NPO法人増毛山道の会

ミズナラの巨木〝健康診断〟

樹木医が状態を確認

北海道遺産に指定されている増毛山道に立つミズナラの巨木の〝健康診断〟が4日、行われ、札幌市在住の樹木医が樹勢などを検分し、健康状態を確認した。

（長谷見直也）

増毛山道に立つミズナラの巨木の健康診断を行う樹木医の崎川さん

増毛山道は江戸時代末期の安政4年（1857年）に浜益、増毛両場所の請負人だった伊達林右衛門が私費を投じて整備し、明治期に完了した現在の増毛町別苅と石狩市浜益区幌を結ぶ全長32キロの山道。NPO法人増毛山道の会（渡邉千秋会長）と留萌振興局が、平成22年度に増毛町別苅～岩尾間約16キロを復元。翌23年度から体験トレッキングを実施しており、28年10月に全線の再生作業が完了。一昨年には、石狩市の「濃昼（ごきびる）山道」とともに北海道遺産に登録されている。

健康診断には、NPO法人ezorock（エゾロック）のコーディネーターで木製玩具などを販売する合同会社森のピタゴラス（本社・札幌市）の代表社員を務め、樹木医、木育マイスターの資格を持つ崎川哲一さん（28）とezorockのボランティアリーダーで北海道大学農学部森林科学科4年の松山由実さん（21）が訪れ、増毛山道の会の小杉忠利事務局長ら会員3人が随行。車両と徒歩で同山道岩尾分岐のそばに立つミズナラに向かった。

増毛山道の会によると、ミズナラの巨木は「山道沿線に立っている樹木では最も太い」とされ、高さは約20メートル、幹の周囲は太いところで5・2メートルほどあり、直径は約1・6メートル。根元の部分は一部で腐食が始まっているため空洞化が見られ、「数年前には大きなマイタケが採れた」という。

崎川さんは、鉄製のくさびや木のハンマーなどを使って古木の表面をたたく「打診」を行ったほか、根の張り具合や枝振りなどの樹勢をチェック。「木が元気で樹木の耐久度が問題なければ『健全』、元気だが耐久度に問題があれば『要観察』、木の元気がなく、かつ耐久度がなければ『危険木』と判断される。森林の中など人の出入りがほとんどない場所では、街路樹のような判定はできないが、ここは風もほとんど当たることがなく、今見た感じでは危険な感じはなく樹勢的には元気な感じにみえる。葉の枯れや樹形などから見ても、かなり状態は良い」と診断。樹齢は200年から千年の間、育ってきた環境にもよるが、だいたい500年ぐらいではないかーという。

小杉事務局長は「岩尾への出口と幌への分岐点に立っている木であり、往時には分岐の目印に使われていたのかもしれない」と、歴史ロマンをかき立てていた。